

**生徒の意見を引き出す社会科授業  
— 討論授業と実物教材を通して —**

教職実践基礎領域  
日佐 瑛仁

**I はじめに**

社会科は一般的によく「暗記教科」と言われているように、社会的事象の用語を覚えるとテストで点数を取れ、成績が良くなると思われることがある。よって、授業も講義式の授業を行い、知識を一方的に伝達することに偏ることもある。加えて、中学校においては、高等学校などの進学による入試があることが知識注入に拍車をかけている。しかし、社会科は、用語を覚えるだけでは、将来において役には立たない。大切なのは、社会科の授業を通して、何を考えるか、そして、自分のかけがえのない意見を形成することであると考え。そこで、生徒が意見を考え、発表できる社会科授業をつくっていくことを課題とした。教職大学院での学びを通して、討論授業に出会うことができた。討論授業は、多くの社会科での実践がある。討論をすることで、討論で発表する資料を探す力を養い、自分の意見を見付け、発表をする力を高めることができる。先の討論授業の実践事例に学び、教師力向上実習では社会科の討論授業を実践した。

また、社会科に対して生徒の興味・関心を引き出したいという思いもある。学部生時代の教育実習では、教材を作り授業を行ったことがある。作った教材を入れた授業を見て頂いた先生からは「生徒が興味をもって授業に参加している姿が見えた」と言って頂けた。この経験から生徒の興味・関心を引き出すことが大切なことを感じた。そこから、興味・関心がなければ、学習に取り組む意欲が上がらないと考えようになった。すなわち、興味・関心こそが学習意欲の根本であると考えている。興味・関心を引き出すために、実物教材の教材開発を行うことを決めた。実物を見ると生徒も学習していることと関連している物が目の前にあるので、学習のイメージもしやすく、頭にも残りやすいと考える。

よって、討論授業と教材開発の二つの軸を持ち、社会科の授業が生徒にとってわかりやすく、自分の意見を形成できる授業を目指した。

**II 主題設定の理由**

**1 過去の実践事例**

**(1) 加藤公明の日本史討論授業とその考察**

加藤の討論授業との出会いは、ゼミの学習で『中等社会の理論と実践』を使い社会科の授業分析をしたことが始まりである。

加藤(2007)が討論授業をするきっかけは、講義

式の授業からの脱却であった。講義式の授業では、「魅力ある学習の場、自己の成長を保証してくれる教育の機会になりえるはずがない」としている。また、加藤は、高校教諭のため日本史での討論をしている。日本史で討論をすることは、「生徒に自分の歴史認識は自分でつくる主体性を回復させ、その認識や認識能力の向上をめざすものでなくてはならない」としており、授業については、「策定された教育内容を一方的に生徒に教えようとする伝達ではなく、生徒の知的好奇心を刺激して歴史を自由に考えようとする問題提起の場にしなければならないし、それぞれの考えを発表したり批判したりする討論の場でもなければならない。」としている。

加藤(2000)は、討論授業について4つの方法を挙げている(資料1)。大きく分けて、直接討論と班別討論がある。

直接討論は、問題の内容を個人で考え、討論を行っていくものである。一人の意見から討論が始まるので、「授業時間に余裕のない時や討論に生徒が慣れていない年度初めの時期」には「有効な方法である」。また、「問題提起を含めて一〜二時間で実施することができ、授業の進行も比較的単純」に行うことが可能である。

班別討論は、生徒をグループにして討論を行っていくものである。タイプ3は、同じ意見をもった生徒同士でグループを編成するのに対して、タイプ4は、近い席者同士のグループなので、個人でもっている意見は、異なっている可能性があるため、グループで意見を合わせるが必要になってくる。

教師力向上実習では、生徒は、討論の方法も知っており、資料を探すことには慣れているので、タイプ3の形で討論を行った。

(資料1) 加藤の4つの討論形態

	タイプ1	タイプ2
直接討論	一人の生徒に意見を発表させ、その後その説への賛否を問い、賛成ならば理由や付け足しを、反対ならば批判や対案(異見)を言わせて、討論を組織する。	1の形態で複数の意見を取り上げ、討論を組織する。

班別 討論	タイプ3	タイプ4
	あらかじめ各人に自説を作らせ、同じ意見の者同士で班を編成させ、討論を行う。	席が近い者同士で班を編成し、協力をしながら班の意見を作り、他班との討論を行う。

加藤（1999）は、討論をする際には、「マニュアルは存在しない」とし、指導をするさいには、問題提起と生徒の自説づくりに重点を置いている。

問題提起については、「生徒にとって、考えたい、どうしても自分が納得できる答えを獲得したい、と思えるような魅力ある切実な問題として提起されなければ」ならないとしている。

自説づくりにおいては、教科書や資料集などを使い、論を立てさせるようにしている。また、図書館の利用しながら生徒に資料を見付けさせるようにしている。そして、教師からアドバイスを生徒にして、生徒の自説を完成させる。

加藤の歴史討論は、歴史を科学的に認識する能力について、実証性、論理性、個性・主体性の4つを獲得することが本来の目的としている。そして、歴史認識を生徒自身につくらせていく。

加藤の実践は、生徒の目線に立ち、生徒が考えてみたい内容を討論の問題としている。そのようにすることで、生徒の学習意欲を向上させることができると考える。生徒が「納得できる答え」を自ら討論のなかから探すことができれば、知識として獲得することができよう。

教師力向上実習では、地理的分野での実践となったが、加藤のあげている、実証性、論理性、個性・主体性は地理でも可能であると考え。3つについて、以下のように考えた。

- |  |
|--|
| <p>①実証性：地理的事象や資料を的確にとらえることができている。</p> <p>②論理性：自ら立てた論が実証性に伴い、筋道が明確であること。</p> <p>③個性・主体性：自ら資料に当たり、納得できるものを採り出し、かけがえのない意見を作ることができる。</p> |
|--|

討論を行うにあたり、生徒は、討論をするための知識をもっていなければならない。そのため、知識を習得してから討論をしなければならないと考える。知識の習得については、教師側の一方的な教え込みをせず、指示や発問をしていき生徒の言葉から授業をつくっていくようにする。よって、基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせるようにしたい。

加えて、討論を行う際に生徒は自分の論を立てていかなければならない。論を立てるためには、資料を探さる必要がある、生徒の思考・判断力を養わせることが可能である。生徒自身で考えたことについては、知識

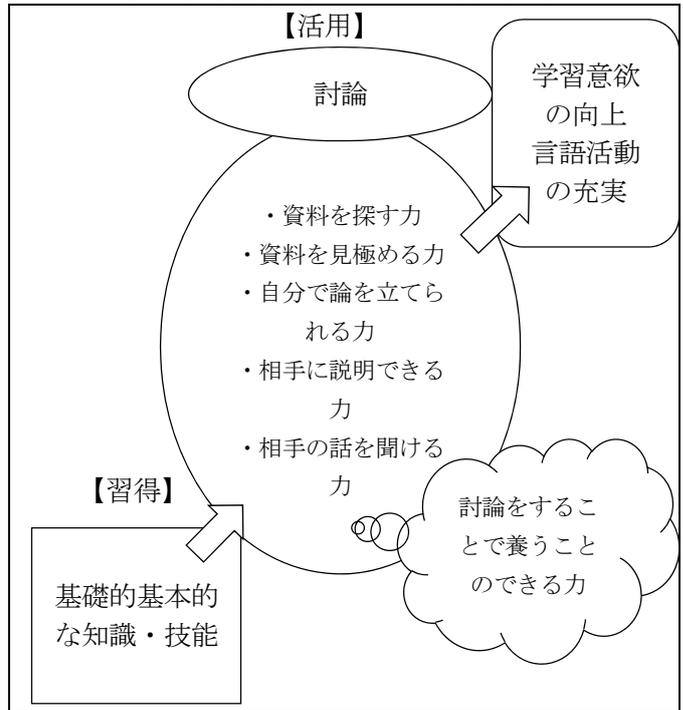
としても定着するであろうと考える。そこから、生徒の学習意欲を引き出せるようにしたい。

さらに、討論は、言語活動の要素の一つである。言語活動として討論を活用し、生徒の学習意欲や表現力も高められるであろう。『社会科教育辞典』によると言語活動については、「読む」「書く」「聞く」「話す」の4つの領域（機能）があり、これらが相互に関連しながら展開される」ものである。討論はこの4つの領域を全て網羅することができる。討論を活用する段階で行うことで、学習を一層深めていきたい。

『中学校学習指導要領解説 社会編』にも、「中学社会科の改訂に当たっての基本的な方針」について「基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得」と「言語活動の充実」が指摘されている。「言語活動の充実」をすることによって、教師からの一方的な講義式の授業から脱却は可能と考える。

これらを踏まえて、以下のように討論を中心とした構想（図1）した授業づくりを進めていく。

（図1）討論を中心とした授業構想図



（2）鳥塚和義の教材開発とその考察

鳥塚の教材開発についても、加藤と同様に『中等社会科の理論と実践』の分析からである。元々、教材を社会科教員になるにあたり、授業で利用できそうなものを収集していた。そのため、鳥塚の実践を分析できたのは非常に大きいものである。

鳥塚も、加藤同様に高校教諭である。高校生が実物教材を見て、興味・関心をもつことができるならば、中学生も実物教材に興味・関心をもつことはできると考える。よって、鳥塚の実践を考察し、実物教材の教材開発を行っていくこととした。

鳥塚（2007）が授業づくりで意識していることは、

「何を（教育＝学習内容）、どんなもので（教材）、どのようにして（授業＝学習方法）、生徒（学習者）が学ぶのか」について考えている。

教材について鳥塚は、「典型性」と「具体性」があるとしている。

「典型性」とは、「教育内容」の基本的概念を具現する多くの事実を含んでいる象徴的な教材<sup>(1)</sup>である。つまり、1つの教材から様々なことを学習することができる教材ということである。

「具体性」とは、「学習者が五感や思考力を用いて分析・操作・総合することができるような」<sup>(2)</sup>教材である。

実物教材には、「典型性」と「具体性」の2つが備わっていることが必要である。教師力向上実習では、教材の「典型性」と「具体性」を鑑みながら、単元に合わせた実践とともに、実物教材を生徒に提示しながら学習を進めるようにした。

## 2 サポーター校の生徒の実態

教師力向上実習は、A市立B中学校の1年生で行った。学力面において、良くできる生徒が多く、知識を獲得することは概ねできている。また、授業は落ち着いた雰囲気の中でできており、教師が話して説明したことも、自主的にメモを取ることが習慣化されている。さらに、説明の中で疑問に思ったことについても、自主的にノートに取るようにしている。加えて、課題を提示し、思考をさせると、ほとんどの生徒は、ノートに自分の意見を書くことができる。しかし、生徒に発言を求めると積極的に挙手をして発言をしようとならない。そのため、教師から指名をして発言をさせることが多い。この課題に対して、生徒が積極的に発言をできるようにしていく必要があると考えた。

## Ⅲ 討論の実践について

### 1 単元名

中学校第1学年社会科（地理的分野）

「ヨーロッパ州のようす」

### 2 単元観

ヨーロッパ州は、一言で言い表すことが難しい地域である。生徒は、これまでに世界地理の学習としてアジア州を学習してきた。本単元では、ヨーロッパ州について、文化や産業の歴史的背景に着目させながらヨーロッパ州の地域的特色を理解することができる。その中で、世界をリードしてきたヨーロッパ州は古くからの歴史があり、気候や地形による農業や工業の発展をしていくことで、EUという地域統合の動きがみられるようになった。一方で、酸性雨や土壤汚染などの環境問題にも直面している。学習のまとめとして生徒に討論をさせていく。討論をすることによって、ヨーロッパ州の特徴を生徒自身で見付けさせるようにする。

### 3 単元の目標

(1) 実物を通してヨーロッパ州について関心を高め、

意欲的に学習に取り組むことができる。

(関心・意欲・態度)

(2) ヨーロッパ州について大まかな地域的特色を理解できる。(知識・理解)

(3) ヨーロッパ州の農産物や気候について統計資料や地図帳を用いて、情報を収集し、自分の意見を形成できる。(技能)

(4) 自分の意見について根拠を示しながら発表できる。(思考・判断・表現)

## 4 単元の指導過程（10時間完了）

時間	学習活動
1	○ ヨーロッパ州の国の位置の確認をする。 ○ ヨーロッパ州の地形を白地図に書き込みをし、理解する。
2	○ ヨーロッパの文化について、自分の身の周りから知る。
3	○ キリスト教の文化について知る。 ○ ヨーロッパ州の世界文化遺産と観光客の関係を知る。
4	○ ヨーロッパ州の工業について、白地図に書き込み、特徴に気付く。
5	○ ヨーロッパ州の農業について、白地図に書き込み、特徴に気付く。
6	○ EUの成立過程の歴史を知る。
7	○ EUによる地域統合でのメリット・デメリットを考える。
8	○ ヨーロッパ州の経済発展と環境問題について理解する。
9	○ 「なぜヨーロッパ州が世界をリードできたのか」について自分の考えを明らかにする。
10 (本時)	○ 「なぜヨーロッパ州が世界をリードできたのか」について討論を行う。

## 5 討論の実践過程

### (1) 実践の概要

地理的分野の「ヨーロッパ州」のまとめの学習として討論を行った。討論の課題は、「なぜ、ヨーロッパ州が世界をリードできたのか」を設定した。

2時間で行い、前半の1時間は、自分の主張する意見を明確にすることとその理由を発表させた。視点として、「文化」、「農業」、「工業」の3点を提示し、各生徒にそれぞれの視点に立たせ、主張する意見を考えさせた。後半の1時間は、意見を討論させて、再度自分の考えをまとめるとともにヨーロッパ州の単元全体の学習のまとめとした。

発表をする際の注意事項として、以下の5点について討論をする際の決まりとした。(資料2)

①資料に基づいて意見を述べるようにする。

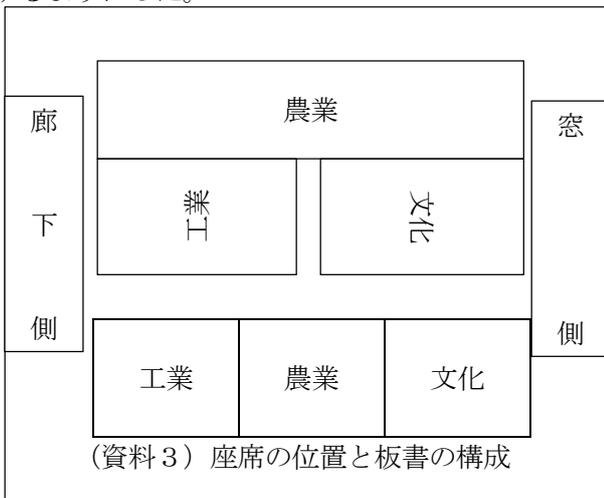
- ②他の人の意見はきちんと聞く。
- ③やみくもに批判をしない。
- ④疑問に思ったことはメモをする。
- ⑤人の意見に流されない。

(資料2) 討論をするためのポイント

5点については、討論をするためのポイントとしてワークシートにも記載し、生徒に確認をさせてから発表をさせるようにした。

意見を明確にするために、3色の紙コップを用意した。紙コップで立場を明確にさせた上で討論をさせた。

討論がしやすいように、座席も変更をした。前3列を向かい合わせるようにした。窓側を「文化」、後ろを「農業」、廊下側を「工業」でグループになるように生徒を着席させた。(資料3) 板書についても、座席と相互するようにした。



### (2) 本時の指導過程

時間	学習活動	指導上の留意点
導入 10分	○ 意見の交流をする。	○ 自分と同じ意見、似ている意見や異なるが納得できる意見を見付けさせるよう指示する。
展開 30分	○ 課題について討論を行う。	○ 「文化」「農業」「工業」の3つに座席をグループ分けて、着席をさせるようにする。 ○ 他の意見について、質問や疑問に思ったことをするよう指示する。
まとめ	○ 課題について	○ 3色の紙コ

5分	自分の考えを考え直し、学習内容をまとめる。	ップを並び替えることによって、考え直した意見を明確にさせる。
----	-----------------------	--------------------------------

### (3) 立場の表明の仕方について

第9時間目と本時の実践では、生徒に立場を明確にさせるために、3色の紙コップを用意した。目的としては、自分がどの立場にするかを決めやすくさせるためと他の生徒がどの立場に立っているのかをわかりやすくさせるためである。赤色の紙コップを「文化」、青色の紙コップを「農業」、黄色の紙コップを「工業」とした。



(写真1) 立場を決める前に説明を聞いている様子

生徒が自分の立場を決めるために、ノートや教科書、資料集から探しだし、ワークシートに根拠となる資料を書きだした。資料を探さしていく中で、自分がどの立場に立っているかを、紙コップで表明するようにさせた。



(写真2) 資料を探している生徒の様子



(写真3) 自分の立場をワークシートに記入する生徒

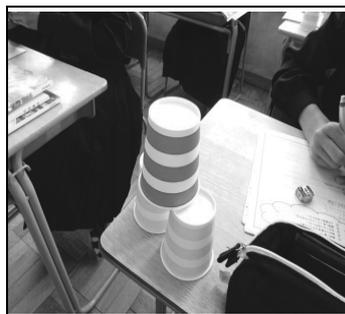
討論が終了した際に、再び自分の考えを作り直した。ワークシートで文章を書くとともに紙コップも使った。自分の考えについて紙コップを重ね、ランキングをさせた。討論が終わった後で紙コップを並び替える生徒が多かった。意見が変わった生徒は、その色を上にしていった。(写真4) また、主張する立場が他の立場とかかわってくることもあり、どの立場も並列であると考えた生徒もいた。(写真5) これについては、討論を行ったことにより、初めに自分が考えた立場が揺らいだと考えられる。揺らいだことにより、どの立場が妥当なのかかわからないと考えたのであろう。さらに、主張する立場が他の立場を土台としていると考える生徒もいた。(写真6) 討論を始める前と変えていない生徒もおり、討論を通して、さらに資料をあたり、生徒の意見を聞いて、その視点が妥当であると考えたのであろう。



(写真4) 討論終了後、「文化」から「工業」に変えた生徒の紙コップ



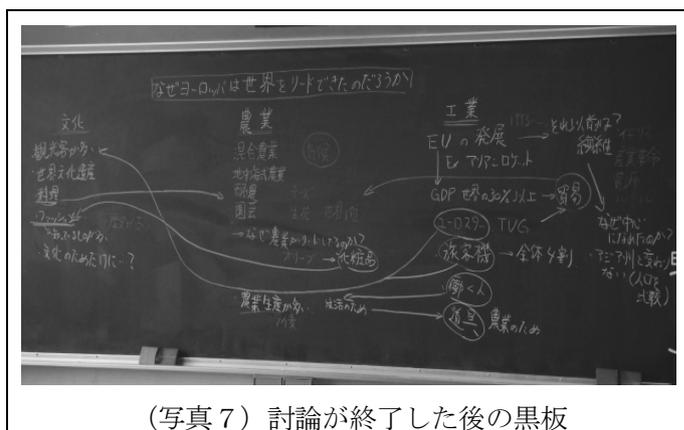
(写真5) 討論終了後、3つの立場が並列になっていると考えた生徒の紙コップ



(写真6) 討論終了後、「農業」と「工業」が土台となって「文化」が1番であると考えた生徒の紙コップ

#### (4) 板書

板書は、生徒の発言をしたことについて要点的にまとめるようにした。黒板を3等分にし、左を「文化」、中央を「農業」、右を「工業」についてそれぞれの視点から生徒が述べた意見を分けて書いた。また、討論以前で知識を習得する授業で出てきた内容については、黄色のチョークを使った。さらに、授業で触れていないが、教科書や資料集に掲載されている内容について生徒が述べた際には、赤色のチョークを使うようにした。加えて、視点を超えて関わりがあるところには、矢印で結ぶようにした。板書についても、加藤はまとめて書いていくようにするとことをすすめている(写真7)。



(写真7) 討論が終了した後の黒板

#### IV 実物教材について

##### 1 黒曜石

原始時代の生活で打製石器に使われていた黒曜石を紹介するために使った。生徒は、黒曜石に注目し、初めて見る黒曜石に驚きの声が上がっていた。さらに、生徒に実際触らせて、重さや質感などを実感させた(写真8)。生徒からは「肉を切ってみたい」という発言があった。本物の黒曜石を通して、原始時代の生活を知ることができる。教科書にも、黒曜石の写真が掲載されているが、実物を手に取って見ることによりイメージをさせることができると考える。今回は、肉の用意や黒曜石を鋭利な刃状にしていなかったが、黒曜石を実際に使うことは、体験学習にもなる。授業の中で、体験的な学習を取り入れることで、生徒もより知識とイメージを結び付けやすくなるであろう。



(写真8) 黒曜石を手にもって観察する生徒の様子

## 2 ユーロ

ヨーロッパ州のEUの学習の導入で、ユーロ（写真6）を生徒に見せた。生徒の反応は、「日本の（紙幣）より小さい。」や「透かしに女性の絵がある。」といった発言をしていた。また、ユーロは、4人グループで見せるようにし、生徒同士が実際のユーロを見て意見や感想を言いやすい状況にした。導入での過程を以下に示す。

T：教師 S：生徒

T： 海外の通貨で知っているお金の単位を上げてみましょう。

S： ドル

S： 元

S： ウォン

S： ユーロ

T： その中で、ヨーロッパで使われている通貨はどれでしょう。

S： ユーロ

T： 今日は、実際のユーロを用意しました。みんなで見てください。

(4人グループにし、ユーロを見せる。)

T： ユーロはどこで使われているかな。

S： ドイツ

S： フランス

S： スペイン

S： イギリス

T： なぜ、ユーロは複数の国で使うことができるのだろうか。

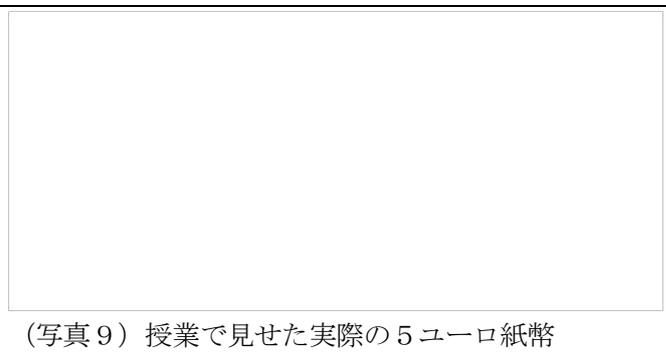
S： EUがあるから。

T： では、今日はEUについて学習していきましょう。

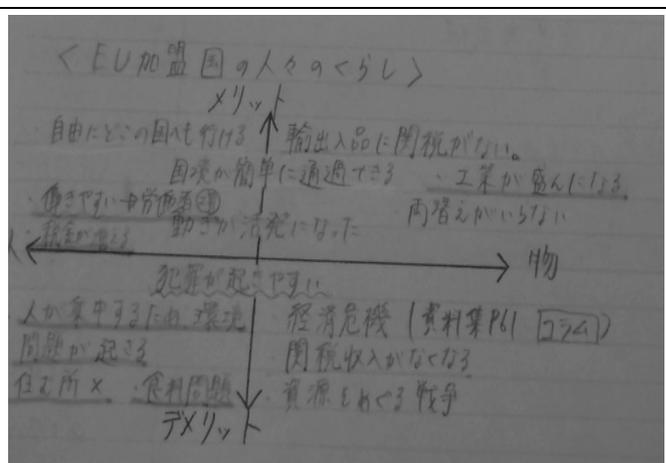
以上のように、ユーロを見せた後に疑問をもたせ、授業の展開に入った。

第7時間目では、生徒に「EUのメリット・デメリット」について考えさせた。その際にも、ユーロによってEU圏内が同一の通貨を利用できることからメリットについて「貿易をする時に通貨の単位を変える必要がない。」や「EU圏内で旅行や仕事で国境を越えて

も同じ通貨だから両替をする必要がない。」と考えた生徒がいた。反対のデメリットについて、「EUの経済が悪くなったら、関係の無い国にも影響が出る。」と考えた生徒もいた。このことから、実際に見た物が生徒の思考にも影響を与えることを生徒の授業内での発表やノートから感じた（資料4）。



(写真9) 授業で見せた実際の5ユーロ紙幣



(資料4) EUのメリット・デメリットについて考えた生徒のノート

## 3 クレジットカード、プリペイドカード、電子マネー

公民の身近な経済活動の内容で実践を行った。現代社会において現金からカードでの支払いが増えてきていることからカードの種類を理解させるために、「クレジットカード」「プリペイドカード」「電子マネー」の3点を用意した。カードについては私物を用意した(写真10)。生徒は、私物と言うこともあり、注目して見ている。また、カードを提示して、カードの説明をしたことで、理解している様子だった。特に、「電子マネー」や「プリペイドカード」という総称より「図書カード」や「manaca」というような名称の方が生徒は知っているの、具体物を提示することで、生徒の身の回りで知っているものと教科書に出てくる用語を結び付けるために有効であったと考える。生徒が普段からなんとなく使っている物でも授業で使うと、興味を示す。教師の手から出ることでより一層の理解を深めることができる。



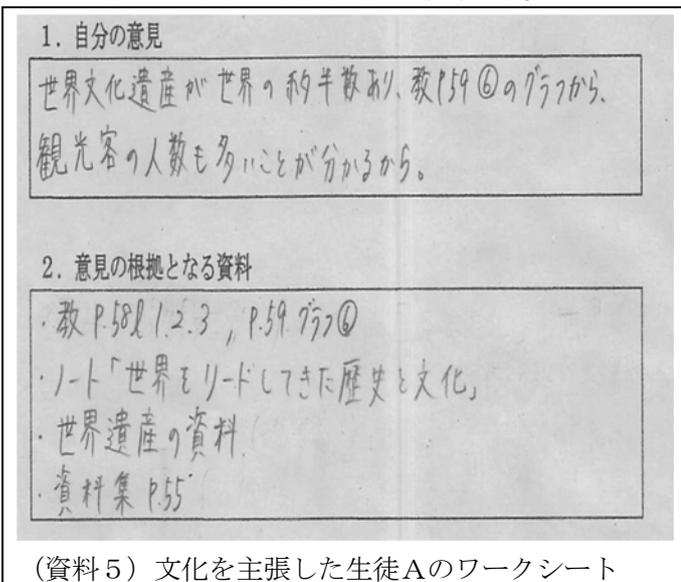
(写真10) 授業で実際に見せたクレジットカード、プリペイドカード(図書カード)、電子マネー(manaca)

## V実践の成果と課題

### 1 討論授業後の生徒のワークシートから

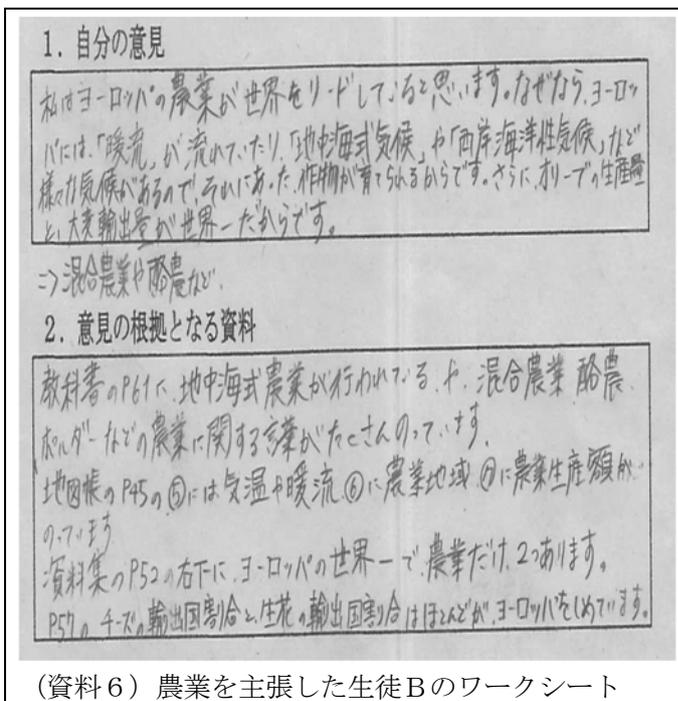
#### (1) 意見の形成について

文化の立場で主張をしている生徒Aは、主に世界文化遺産と観光客の人数を基に主張をしていた。世界文化遺産については、第3時間目の授業で取り扱った。また、観光客数については、教科書に掲載されており、生徒は、教科書の資料を基に思考していた。グラフから読み取ることができている。グラフの読み取りについては地理的技能としての能力として必要な力である。討論をしていく中で、地理的技能を養うとともに活用することが可能であると考え(資料5)。



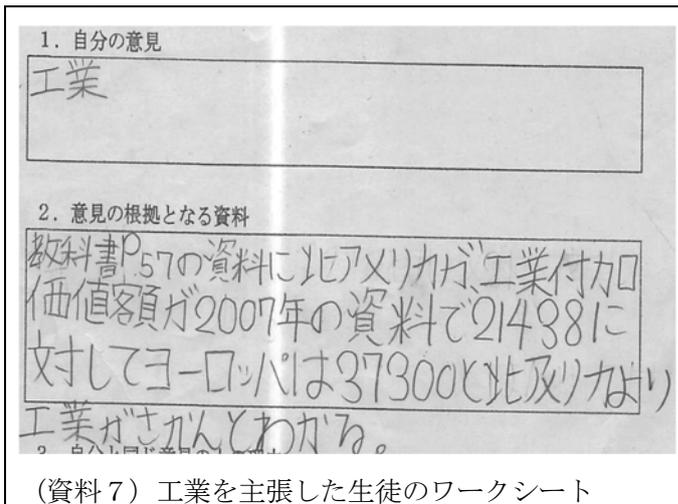
(資料5) 文化を主張した生徒Aのワークシート

農業の立場から主張した生徒Bは、農業は、地中海性気候を生かした地中海式農業、西岸海洋性気候を生かした混合農業や山岳地帯の酪農を押さえることができていた。気候については、農業の時間で扱っていたので、習得した知識を活用し論を立てている。また、地図帳の農業生産額を根拠として意見を形成していた。この資料については授業では扱っていない資料であるが自分で見つけ出すことでできた。他の資料として、ヨーロッパ州の農業が世界一(オリーブ、大麦)の農作物も挙げられている。加えて、チーズと生花の輸出国の割合においてもヨーロッパ州が大半を占めている資料を見つけている(資料6)。



(資料6) 農業を主張した生徒Bのワークシート

工業の立場から主張した生徒Cは、北アメリカ州の工業付加額との比較によって立場を主張していた。北アメリカ州は、アメリカ合衆国とカナダであるが、ヨーロッパ州の方が高いことに着目していた。生徒は、特に、アメリカ合衆国の工業については多いと感じていたと考えられる。ヨーロッパ州は、1か国1か国が小さいので、工業の生産額は少なくともある。しかし、ヨーロッパ州全体と比較するとアメリカ合衆国の方が劣ることからヨーロッパ州の工業が盛んであると捉えたのであろう。生徒は、資料について他の資料と比較して考えることができていた。資料を比較し考察することは、地理的な視点として大切な事である(資料7)。



(資料7) 工業を主張した生徒のワークシート

生徒の多くは、教科書や資料集を参考にして、自分が妥当と思う意見を書いていた。自分の勝手な想像で意見を書くのではなく、第三者からもわかる資料を提示し意見を書くことで、客観的にも見ることができる。また、中学校段階において、資料を活用して意見をつ

くることは、社会科の視点では、必要な能力である。資料を基に生徒は、例えば、「教科書〇〇ページには」と発言をしていたので、発表をしている際には、聞いている生徒も資料を見ながら聞くことができた。

(2) 討論のまとめについて

討論が終わったあと各自でまとめを書かせた。生徒のワークシートより、文化でまとめた生徒Dは、資料集を活用し、自分の意見を更に強化した。また、討論で話し合われた工業から出されたユーロスターについて観光客が訪れやすくするために開発をしたと言う論を立てた。生徒Dは、自分の意見をしっかりと教科書や資料集を参考にして論を立てているので、討論の際も、自分の意見を述べる事ができていた。文化を主張していた生徒のほとんどは、世界文化遺産の多さを着目していた。世界文化遺産の半分は、ヨーロッパ州にあることから、ヨーロッパ州は文化であると考えたのであろう(資料8)。

7. 討論のまとめ

ヨーロッパの文化は、歴史がとてつもないため、世界をリードしているのだと思う。理由は、資料集P55に古代から歴史があることが書いてある。また、世界文化遺産も多々、そのため観光客が訪れ、ユーロスターなども開発されたため、世界をリードしているのだと思う。

(資料8) 文化でまとめた生徒Dのワークシート

農業についてまとめた生徒Eは、気候に注目して書いている生徒が多かった。気候は、第5時間目の授業で取扱っていた。ヨーロッパ州の気候については、地図帳や白地図での作業によって特徴を掴んでおり、生徒は、ヨーロッパ州独特の気候がヨーロッパ州の農業を発展させたきっかけであると考えたようだ。加えて、資料からヨーロッパ州の農業作物の統計を参考にしてまとめていた(資料9)。

7. 討論のまとめ

やはり世界をリードしているのは、農業だと思います。工業や文化の土台となるのは、農業だし、農業は気候を利用しているので、工業製品は少しは関係ないと思います。作物が特有の気候でたくさん育っているため、工業や文化より、世界をリードしている。資料を見て、農産物は、ヨーロッパ州があげました。なので、世界をリードしているのは、農業だと思います。

(資料9) 農業でまとめた生徒Eのワークシート

工業でまとめた生徒Fは、アジア州との比較をすることで、ヨーロッパ州の工業が発展していることに注目してまとめていた。アジアと比較し、ヨーロッパ州の人口は少ない。しかし、工業での額が多いということで、工業がヨーロッパ州の中でも1番であるという主張をした。生徒Fは、アジア州との比較をした。アジア州の学習は、ヨーロッパ州の前単元に学習をしていた。アジア州では、人口をテーマにして学習をしていた。アジア州は、人口が多いため工業の生産額が多いと学習していたことを引き出していた。ヨーロッパ州の学習であるが、前単元で得た知識を活用してまとめることができた(資料10)。

7. 討論のまとめ

やはり私は、工業ではないかと考えた。なぜなら農業は工業のおかげで発展したからで農業はよく、マーケットのかわりや工業の額が多く、人口の少ないヨーロッパがアジアと比べてかわらぬので工業だと思います。

(資料10) 工業でまとめた生徒Fのワークシート

討論が進んでいく中で、生徒は視点同士が関わりあっていることに気付いた。討論を基に3つの視点関わりあってヨーロッパ州が世界をリードできたと言うまとめをする生徒Gもいた。どの視点で決めるのではなく、3つの視点の良さを自分の中で取り入れて考えた結果であると考えた。(資料11)

7. 討論のまとめ

ヨーロッパが世界をリードすることができたのは、食の文化や古い歴史のぬいスポーツなどを発信し、より観光客が増え、旅客機の利用人数が増えたりなど、「文化」「農業」「工業」の3つ全てがあるからこそ世界をリードできた。

(資料11) 3つの視点全てでまとめた生徒Gのワークシート

2 実践を通して学んだこと

(1) 討論授業について

ある生徒のまとめには、「楽しく学べました」という

感想も書いてあった。この感想を書いた生徒は、学力面が困難であり、集中力に課題がある。この討論を通して、「楽しかった」と思えたのは、この生徒によって学習面でのプラスになったと考える。

討論終了後、数名の生徒からは、「もっとやりたい。」や「歴史でも討論をしたい。」と言う生徒もいた。討論は、生徒同士でテーマに沿って話し合うことで盛り上がりを見せていた。そのため、自分の意見を戦わせることが楽しく感じたのであろう。討論をしている際にも、他の意見を凌駕させようと、同じ意見同士の生徒で必死になって資料を探す姿も見られた。そのため、生徒は自然と資料を手に取り、学んでいた。討論をすることで、授業内で触れられなかった内容も自分たちで探し、発表をすることができる。このように、生徒は教師側が想定している内容を超えて学習することができると感じた。

討論の実践後に、B中学校では、定期テストが行われた。テスト週間中には、生徒同士でテスト勉強を行う、「テスト対策教室」が行われた。その際に、社会科のテスト勉強をしていた生徒からは、「ヨーロッパは農業だ」ということを口にしていて、討論から4週間ほど経過していたが覚えているようであった。つまり、討論をしたことによって知識が定着されていると感じた。このことから、単元観で触れた「ヨーロッパ州は一言で言い表すことが難しい地域」であったが、生徒は討論を通して言いまとめることができた。すなわち、ヨーロッパ州の地理的特色について大観することができたと言うことができると考える。

教師力向上実習において討論を行ったが、単元のまとめとして討論を実施することが可能であることがわかった。討論をすることで、生徒が内容とは違うことを発言することや討論をする時間が取れないというような批判がされることがあるが、生徒に、討論をする際のルールやきまりをあらかじめ伝えることで、ルールやきまりの中で討論をすることができる。また、課題とは違う内容の発言は、生徒は自分たちで自然と切っていく。他の意見を反駁するためには、課題に沿わなければ、再び反駁されてしまう。生徒は、いかに自分の立場から資料を見つけ出すか必死になるので、いい加減な発言をすることが出来ないであろう。また、第9時間目には、自分の立場を発表させた際に、理由も発表させた。生徒は、既習事項から発表をすることができ、単元の復習としても捉えることができた。そのことで、教室全体での学びの共有ができ、学習内容を揃えることができた。よって、単元のまとめとして討論を行うことができたと考える。

討論について生徒は、小学校段階で学習を行っている。討論の進め方や方法については既習事項になっているので、中学校において討論の形式について学習をする時間は不要であり、生徒は学び方を活用した学習

をした形としている。

生徒の実態では、自ら発言をすることが少ない点を課題として挙げた。討論では、沈黙の時間が少なく、普段静かに授業を受けている学級とは思えないほどに次々と生徒は発言をしていた。このことから、生徒自身で考えてみたいとも思う学習課題であれば、自分の納得できる答えを見つけ出そうとすることがわかった。よって、加藤が主張している問題提起の考え方が必要であると感じた。

## (2) 実物教材について

黒曜石、ユーロ、クレジットカード、プリペイドカード、電子マネーを教材として利用した。どれも、実物だったので、生徒の反応が良く、提示すると顔を上げていることが多かった。生徒は、実物に興味を示すので、興味を引き出すためには、とても良い物であると考え。実物は、実際に触ることができるので、感覚から学習できる。

黒曜石は、原始時代を学習する際に使うことで、原始時代の人の生活を具体的に理解することができる。原始時代の人々の生活は、教科書だけのみ知ることができず、想像するしかない。黒曜石を通して、黒曜石がどんな使い方をしていたか実物を見ることでより生徒の創造力を引き出すこともできると考える。

ユーロは、EU圏で使われている紙幣として生徒に提示した。普段使っていない外国の通貨を手にする経験がない生徒にとって、驚きであり興味深く観察をしていた。このことから、ユーロに関わらず、外国の通貨を授業で提示することは、生徒の興味・関心を引き出すことができるので、諸外国の通貨を用意することでより授業の内容が充実すると考える。

クレジットカード、プリペイドカード、電子マネーについては、今後生徒が利用の機会が増えてくると予想されるので、利用の仕方を理解が必要である。カードで決済される社会（キャッシュレス社会）や通貨とのメリット・デメリットについて考えさせることのできる教材になると考える。

## 3 今後の課題

### (1) 討論授業

討論を行い、授業では、生徒が自分の意見について資料を基に話し合うことができた。しかし、授業が終わった後ある生徒が「授業で話せなかった」ということを言った。つまり、授業内の討論に参加できていなかったということである。討論をさせて、無理矢理に発言していない生徒を発言させようとは考えていない。だが、討論の内容についていけない生徒ならば、発言をすることもできないであろう。そのような生徒をも討論に参加できるような授業づくりを考えていかなければならないと、生徒の言葉から考えさせられた。

討論の方法として、加藤の4つの討論形態のうちタイプ3の班別討論で行った。3つの視点で班別にした

が、それぞれの視点でさらに少人数でのグループにさせるとさらに、生徒同士の学び合いの機会が増えると考えた。生徒は、意見を発表すると生徒同士で話し合う姿が見られた。よって、4人程度のグループをあらかじめ作っておくことで、意見の交流がしやすくなるであろう。タイプ3で討論を行ったが、他のタイプの形態は行わなかったため、他の形態でも討論を授業に入れて行っていきたい。

実証性、論理性、個性・主体性の3つについては、全員の生徒が、資料から自分の論を立てることができた。このことから、論理性についても十分獲得できると言えよう。個性・主体性についてもそれぞれが自分で納得できる答えを探し出すことができていると授業後のワークシートからも読み取ることができた。よって、歴史だけでなく、地理においても討論をすることで、加藤の考えている能力を獲得することができる。考える。

今回は、時間の都合もあり、教師のアドバイスによって生徒の自説づくりの支援をすることができなかった。自説づくりのアドバイスを含めた討論については今後の課題として取り組んでいきたい。

問題提起については、「なぜ、ヨーロッパは世界をリードできたのか」と設定したが、生徒にとって切実のある課題に設定をすることができたと考える。切実性のない課題だったら討論に深みももてなかったであろう。しかし、教師側が設定していた課題を生徒がその課題に対して資料を探して討論をすることとなった。本来であれば、学習をしていくなかで、生徒が不思議に思ったり、疑問に感じたりしたところから討論の課題が生まれるようにしていくことができる単元構想を練っていくことが必要と感じた。これがさらに討論が成功させるためのポイントとなるであろう。

## (2) 実物教材

実物教材の有効性は、授業で取り扱った物だけでも感じる事ができた。実物教材を見せて、生徒に実感をもたせることができたが、実物教材から疑問をもたせたり、課題を掴ませたりすることができなかった。実物教材は、ただ見せるだけでなく、そこから学習できるようにしていきたい。また、教師力向上実習では、用意できなかった実物教材については教師人生を通して収集し、生徒に見せていきたい。実物教材として、主にモノを中心に教材を用意した。他にも、写真や絵画資料などにも注目していき、授業で見せられるようにしたい。

黒曜石については、鳥塚も実践で取り上げていた(2015)。鳥塚は、黒曜石を実際に鑢状にして生徒に提示をしていた。鑢状にすると生徒も原始時代の学習と結びつきを強くすることができる。そのようなことで、「生徒に実験考古学の面白さ、楽しさを感じ取ってもらえたら大成功」<sup>(3)</sup>と鳥塚は考え

ている。生徒に当時の生活を追体験できるようにすることが大切である。教師力向上実習では、授業の展開を含め、生徒が追体験できるように仕組むことができなかった。

教師力向上実習で使った教材は、どれも生徒を引きつけるものがあつたと実践を通して実感した。「具体性」については、生徒が手に取って観察したり、教材について話し合ったりしていることがあつたので、「具体性」のある教材である。考える。「典型性」については、教材研究が浅く、生徒も教材だけで学習するにはいたるのが難しかったので、「典型性」のある教材となれるように更なる開発をしていきたい。

### 【注】

(1) 豊田 憲一郎 「小学校社会科教育に関する一考察Ⅱ—教材の視点から—」(『九州ルーテル学院大学紀要 visio』第37号、2008)

(2) 鳥塚 義和 「モノ教材と「ものづくり」による日本史の授業」(和井田 清司・二谷 貞夫編 『中等社会科の理論と実践』 学文社、2007)

(3) 鳥塚 義和 「モノ教材が語りだす」(『地理歴史教育』2015年1月号)

### 【参考文献】

加藤 公明 『日本史討論授業のすすめ方』(日本書籍、2000)

加藤 公明 「生徒同士の討論を導入した日本史の授業」(和井田 清司・二谷 貞夫編 『中等社会科の理論と実践』 学文社、2007)

加藤 公明 「討論授業をしてみようと考えている、あなたへ」(『歴史地理教育』 1999年4月号)

鳥塚 義和 「モノ教材と「ものづくり」による日本史の授業」(和井田 清司・二谷 貞夫編 『中等社会科の理論と実践』 学文社、2007)

日本社会科教育学会編 『新版 社会科教育辞典』(ぎょうせい、2014)

文部科学省 『中学校学習指導要領 社会編』 2008

鳥塚 義和 「モノ教材が語りだす」(『地理歴史教育』 2015年1月号)